

有吉佐和子

遠藤周作

藏原惟人

石川 淳

大江健三郎

黒井千次

昭和作家論集成

磯田光一

伊東静雄

大岡昇平

河野多恵子

伊藤 整

大岡 信

小島信夫

井上光晴

開 高 健

小林秀雄

井上 靖

春日井建

坂口安吾

光一
作家論集成

新潮社版

印刷 昭和六十年六月二十日

発行 昭和六十年六月二十五日

著者

磯田光一
いそだ こういち

定価 三五〇〇円

昭和作家論集成
しょうわ さつ か ぶん しゅうせい



発行者 佐藤亮一 発行所 株式会社新潮社

郵便番号一六二／東京都新宿区矢来町七一／電話〇三―二六六―業務五―一一・編集五四―一／振替東京四―八〇八

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 大口製本

© Koichi Isoda, Printed in Japan, 1985

乱丁・落丁本は御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

I

芥川龍之介	芥川龍之介論——ある大正精神の終末	11
小林秀雄	小林秀雄論——受難の現実性について	30
蔵原惟人	言葉なきリア王——蔵原惟人論	71
川端康成	『川端康成短篇全集』について	94

II

伊東静雄	伊東静雄論——故郷喪失者の抒情	101
保田與重郎	高校時代の保田與重郎	111
太宰 治	“家霊”探索者の運命——太宰治論	120
坂口安吾	無頼昇天——坂口安吾論	131
石川 淳	石川淳論——ある仮面の形成	141
高見 順	挫折者の夢——高見順論	153
伊藤整・高見順	オデュッセウスの帰還——伊藤整、高見順再考	163
丹羽文雄	『蓮如』について	178

井上 靖 『後白河院』について 179

『本覚坊遺文』について 182

佐多 稻子 夢のゆくえに來たもの——『私の東京地図』の位置 184

岡地 文子 美的ユートピアンの宿命——岡地文子論 186

中里 恒子 外人墓地と崖下——中里恒子氏の戦後 203

『誰袖草』について 206

芝木 好子 『火の山にて飛ぶ鳥』『羽搏く鳥』について 208

野口 富士男 迷路の地誌学——『散るを別れと』評 214

宿駅遍歴譚の転調——『いまだ道のべに』評 217

平野 謙 平野謙と昭和文学——その死を悼む 219

中村 光夫 近代主義文学理論の亀裂——『芸術の幻』について 222

山本 健吉 伝統感覚の豊饒——山本健吉論 230

III

大岡 昇平 大岡昇平論——ある精神の軌跡 241

収容所としての戦中・戦後——『俘虜記』解説 251

戀愛小説と鎮魂——『花影』私観 259

武田泰淳 非革命者のキリスト——武田泰淳論 265

花田清輝 ハイド氏の修辭学——花田清輝論 278

埴谷雄高 埴谷雄高・人と作品 289

竹内 好 仮構の救世済民——竹内好論 301

福田恆存 福田恆存論——自由の二元性 316

吉田健一 乞食王子の憂愁——吉田健一論 334

寺田 透 寺田透論——スタヴローギンの肉体 349

IV

三島由紀夫 殉教の美学——三島由紀夫論 365

苛烈なるソドムの仮面 403

『豊饒の海』論 413

塚本邦雄 失われた磔刑を求めて——塚本邦雄論 427

春日井建 「熱き冷酷」の宴——春日井建論 439

澁澤龍彦 兇器のダンディズム——澁澤龍彦論 449

V

安岡章太郎 安岡章太郎論——戦中派の羞恥について 463

吉行淳之介 吉行淳之介論——ダンディズムの現実性 473

「見る」ことの力学——もう一人のトニオ・クレーゲル 485

遠藤周作 政治の対極にあるもの——『侍』について 494

小島信夫 小島信夫の文学——その時代感覚を中心に 496

水上 勉 『雁の寺』『越前竹人形』について 506

河野多恵子 生活虚構化のゆくえ——『草いきれ』について 510

極限をめざす夢——『雙夢』について 512

吉村 昭 『戦艦武蔵』について 514

丸谷才一 ヨナ書と現代——丸谷才一論ノート 518

丸谷才一論 529

VI

安部公房 詩人としての安部公房 537

移動空間の人間学——安部公房論 544

井上光晴 井上光晴論——苦痛の聖性について 559

吉本隆明 孤絶者の内面——吉本隆明論抄 571

大江健三郎 テロルの寓話——大江健三郎論 585

開高 健 集団としての人間——『バニック』の動物界 595

江藤 淳 批評の時代性と先駆性——『成熟と喪失』論 601

言語における“攘夷”と“開国”——『一族再会』論 610

歴史を支えるもの——『海は甦える』をめぐって 623

大岡 信 方法としてのバステイ—シュ——「孤心」のゆくえについて 631

有吉佐和子 “紀ノ川”のゆくえ——有吉佐和子論 635

倉橋由美子 倉橋由美子論 643

高橋和巳 高橋和巳論——自罰者の聖痕 648

黒井千次 時間の変容——黒井千次論 659

中上健次 “路地”の消えるとき 667

津島佑子 暴力のメルヘン——『燃える風』について 669

あとがき

672

昭和作家論集成

芥川龍之介

芥川龍之介論

——ある大正精神の終末

芥川龍之介はその死に先立って、自伝的なスケッチ『或阿呆の一生』を書いた。そして、その第一章は彼の「時代」の解説に費されている。

それは或本屋の二階だった。二十歳の彼は書棚にかけた西洋風の梯子に登り、新しい本を探していた。モオバスサン、ポオドレエル、ストリントベリイ、イブセン、シヨウ、トルストイ、……

そのうちに日の暮は迫り出した。(中略)彼はとうとう根気も尽き、西洋風の梯子を下りようとした。すると傘のない電灯が一つ、丁度彼の頭の上に突然ぽかりと火をともした。彼は梯子の上に佇んだまま、本の間に動いている店員や客を見下した。彼等は妙に小さかった。の

みならず如何にも見すばらしいかった。

「人生は一行のポオドレエルにも若かない。」

彼は暫く梯子の上からこういう彼等を見渡していた。

(傍点・磯田)

近代日本の生んだ作家の中で、これほど見事に自分の歴史的な位置に関して書き遺して行った作家は、ほかにあるまい。芥川を肯定するにせよ、否定するにせよ、この細心に計算された象徴的な挿話は、芥川の文学の最重要部を暗示しているように思われる。「妙に小さくみすばらしい本屋の店員や客」によって象徴されるこの社会的現実としての人生、そして、この陰鬱な人生のあなたに余りにも美しく輝いている「一行のポオドレエル」——この両者の間に横たわる不均衡、いいかえれば「社会」と「芸術」との間の抜きさしならぬ背反を、純粋に文学上の問題として解決しようとして試みたところに、芥川の文学の、他に類例を見ない近代的な性格があったと思われる。

人生は一行のポオドレエルにも及ばぬと芥川は言う。そして人々は、そこに芥川の芸術至上主義の端緒を見いだしたのであった。言葉を額面通りにうけとれば、そういうことにならなくもない。だが果して単純にそう信じてよいものか。私は思う——もし芥川が「一行のポオドレエル」に全幅の信頼を置くことが出来たとしたら、おそらく『或阿

『呆の一生』の第一節は、わざわざ「時代」という題名を与えられる必要はなかったであろう、と。芥川は明確な意識をもって自己を「歴史」の中に置いていた。だから私は、志賀直哉の、「芥川君は始終自身の芸術に疑いを持っていた。」（『香掛にて』）という言葉に、より多くの真実を感じるのである。単に「表現」という点からすれば、「人生」はついに「一行のポオドレエル」に及ばないかも知れぬ。しかし、人生は表現されるためにあるのではない。すでに『一塊の土』を書き、『玄鶴山房』を書いてしまった作家にとって、ポオドレエルの全作品をもつてしても救い得ぬ人生の悲劇の存在するということは、余りにも自明のことであつた。人生の悲惨を単に悲惨として描いてみることによつて、人は何を手に入れたか。彼の立ち止まったのはそこである。おそらく芥川は知つていた。リアリズムの限界もそして懷疑の限界も。雨の中で紫色の火花を発している電線を見ながら、「その妻まじい空中の火花だけは命と取り換えても、つかまえたかつた」（『或呆の一生』）と考える作家は、誰よりも人生の「火花」から遠い地点に立っている人間であつた。彼は芸術を信じたのではない。芸術を信じたかつたのだ。名作『蜜柑』の書かれたのは米騒動の翌年だつたということを忘れまい。

『蜜柑』の少女は、米価の高騰による経済的な理由のために、止むなく奉公に出なければならぬ少女であつたかも知れない。

知れない。そして彼女の美しい心情に涙をもよおす「私」の心は、すでに「卑俗な現実」の事件を満載した夕刊の記事によつて打ちひしがれていたのである。一方では「一行のポオドレエル」に心を燃やしつつも、他方「小さくみすばらしい」とは知りながらも「本の間に動いている店員や客」の姿が見えてしまつたということ、それは芸術至上主義どころか、「一行のポオドレエル」に対する根本的な懷疑の表明だつたのではあるまいか。福田恆存の言葉を借りれば、芥川の片足は「近代自我の自己主張にとまどいしている民衆の無智の上に載つていた」（『近代日本文学の系譜』）のであつて、自分の少年時代の生活の中にしみこんでいる「中流下層階級の貧困」を憎悪しつつも、たえず自分の血液の中に「下町的なもの」を意識せずにはいられたかつた宿命ゆゑに、彼の芸術至上主義は、はからずも芸術否定の情熱と表裏をなして成立せざるを得なかつたのである。『西方の人』において、彼が一方では天才・キリストの高らかな精神の昂揚に共感を覚えながらも、同時に、「世間智と愚と美德」を具えた俗人・マリアに対しても涙を注ぐことを忘れなかつた理由がそこにある。むしろ宮本顯治のように、芥川を「ブルジョワ的狭隘性を内包している」という理由で批判し去ることも可能であろう。だが芥川が死んで三十余年、我々は果して彼の遺した課題を解決し尽くしたか。少なくとも私の目には、例えば、彼の遺稿

の中に含まれている『手』という詩に描かれた現実、今日においてさえ、到底古びているとは思えられないのである。

ブルジョワは白い手に

プロレタリアは赤い手に

どちらも棍棒を握り給え。

ではお前はどちらにする？

僕か？ 僕は赤い手をしている。

しかし僕はその外にも一本の手を見つけている

——あの遠くに餓え死したドストエフスキイの子供の手を。

芥川龍之介は明治二十五年に生れた。新原敏三の子として生れ芥川家に入籍した龍之介にとって、養子という宿命は終生、彼の心の重荷になっていたようだ。「彼はいつ死んでも悔いなくように烈しい生活をするつもりだった。が、不相容（ふさぎあ）養父母や伯母に遠慮勝ちな生活をつづけていた」という『或阿呆の一生』の言葉は、龍之介の偽わらぬ感慨であったに相違ない。もちろん、芥川家には江戸の通人的な

雰囲気があり、また頭の良かった龍之介が養父母から相当の期待と寵愛とをうけていたという事情もあった。しかし、自分が養子であるという意識は、結果的には、やはり龍之介の心に異様なコムプレックスを作り上げるのに役立っていたようだ。『大導師信輔の半生』によれば自分が牛乳育ちの子供であるということにさえ、一種の劣等感をいだいていたらしい。むろん三十五歳のときに書かれた『大導師信輔の半生』を、作者の少年時代の忠実な再現であると素朴に信じてよいかは問題であらう。しかし三十五歳の作者によって加えられた意識的な歪曲を、必要以上に大きく考へることも間違いであらう。或る程度の誇張を割引すれば、私はやはり『大導師信輔の半生』は龍之介の生い立ちを知る随一の資料である、と考えたいのである。

ところで「棟割長屋に雑居する下流階級の貧困」ではなかったにしても、「体裁を繕うためにより苦痛を受けなければならぬ中流下層階級の貧困」は、敏感な龍之介の心に少なからず暗い影を落していた。伝統的な美德を信じ「古い一冊の玉篇の外に漢和辞典を買うことさえ、やはり『奢侈文弱』だった」養父は、龍之介の目には、それが憎むべき存在である以前に憐むべき人間と見えたとに相違ない。「子は文人趣味を軽蔑するものなり。」（『統野人生計事』）という言葉背景に置いて考えれば、経済的な実力を伴わずに、江戸の通人の形骸化した格式を守っている養家の

生活態度は「中流下層階級の偽善」の象徴としか見えなかったのも当然であった。「風月」の菓子折に近所の菓子屋

の安物のカステラを詰めて親戚への進物に使う没落に顔した旧家の偽善こそ、龍之介の心に養家への憎悪の心情を植えつけずにはいなかったのである。そこには「実質」ではなく「形式」だけがあった。「自然」ではなく「人工」があった。母乳で育った自然児に対するはげしい羨望は、自然児・志賀直哉への羨望にも相通じるものがあつたと思われる。結婚問題に関しても、志賀には家を捨ててまでも己れの意志を貫徹するだけのエネルギーがあつた。そこに学習院出身のどら息子と下町出身の龍之介との間の決定的なひらきがある。たとえ家を捨てても、世間は自分の背後にいつも「家」を想定して自分を扱ってくれるであらうという確信だけは、志賀から離れたことはなかったのである。いや、ここで階級の相違を持ち出すことが憚られるなら、単に両者の性格の相違と考えておいても一向に差支えはない。明治末期から大正初期にかけての日本の近代自我が、その無限の可能性を立証するために白樺派の存在を必要としたのと同じように、大逆事件と乃木殉死によって幕を開かれ米騒動や大震災を経験しなければならなかった大正時代は、おのれの精神の自画像を描き出すために、ともかくも一行のボオドレエルへの渴望と下町の人生の宿命とに引き裂かれる痛ましい一つの個性の存在を、何よりも必要と

していたのであるまいか。そこに芥川の文学ののっぴきならぬ歴史性がある。

明治四十三年、芥川龍之介は府立三中から一高に入った。生来行動的な性格を持たなかった彼は、ここでもシニシズムの色濃い生活を送っていたらしい。明治四十四年に書かれたと推定される中塚癸巳男宛の手紙によると、彼は「酔っている一方において絶えず醒めていた」という。しかし青年期に特有な自意識の苦悶の中にも、彼の内心には一つの強烈な欲求が芽生えていた。『大導師信輔の半生』の言葉で言えば、「精神的に偉いもの」になりたいという欲求であつた。そして「精神的に偉い」とは、まず第一に「哲学的」であることであり、第二に「芸術的」であることだつた。もちろん、ここに言う「哲学的」「芸術的」な偉さが、具体的にどういうことを意味しているかは別としても、それが少なくとも下町の中流下層階級の対立概念であつたことは事実であらう。芥川の文学的影響の源泉が、主として十九世紀末のヨーロッパ文学であり、また明治末期の耽美主義であつたにしても、それらを支えるものとして、より人間的な或るものを考えておくことが必要であらう。『或旧友へ送る手記』に述べられているように、龍之介もまた、かつては「みづから神にしたい一人だつた」のだ。理智の人・龍之介にも、ロマン・ローランに感激し、白樺派を支持した一瞬はあつたのである。